

# 第18回AAF戯曲賞 審査会レポート

一次審査会 9月25日

二次審査会 10月29日



審査員(写真左から)

三浦基(演出家、「地点」代表)

篠田千明(演出家、作家、イベントー)

羊屋白玉(演出家、劇作家、俳優、「指輪ホテル」芸術監督)

やなぎみわ(アーティスト)

鳴海康平(演出家、「第七劇場」代表)

司会・進行 山本麦子(愛知県芸術劇場)

会場 愛知県芸術劇場内会議室・館長室

去る9月25日、10月29日に第18回AAF戯曲賞一次審査会、二次審査会が愛知県芸術劇場内にて行われました。今回は国内外から109作品のご応募をいただき、審査にあたり審査員全員が全作品を読んだ上で議論が行われました。

本来非公開の会議ではありますが、審査員の皆様にご了承を得まして一部を抜粋してお伝えします。(編集している部分があることをご了承ください)

## 一次審査会(9月25日)

司会 皆様、お集まりいただきましてありがとうございます。今年も戯曲賞審査をスタートします。第18回は、やなぎみわさんが加わって5名での審査となります。よろしくお祈いします。今回は109作品の応募がありました(うち1作品は応募後に本人から辞退連絡)。沖縄から北海道まで日本各地、また、海外在住の方からもご応募がありました。年齢の幅も広がっています。

やなぎ 審査に入る前に質問しても良いでしょうか。

応募作品の半分くらいが上演された戯曲だけど、それは審査に影響しますか？

三浦 特に気にしない。

羊屋 私はあるかな。

篠田 私は今回は上演していない作品を推す派。

やなぎ 何回も上演されている作品もあるが、そういう戯曲は読んでいて分かる。全く上演なしのものもあって、自由度が全く違う。上演を繰り返されている作品は完成度は高いけど自由度は低い。比べ難いと思った。

篠田 それぞれの基準で良いと思う。

やなぎ 分かりました。

司会 全体の印象はいかがでしたか。

鳴海 総体的に見ると、水準が高いと感じました。

三浦 確かに今年はレベルが高かった。これまでは半分くらい型にはまった作品という印象だったが、今回はそういう作品は少なかった。

しかし、とびぬけてコンセプチュアルなものは減った印象があるので単純に比較して例年より良いのかは疑問だが……。

鳴海 そうですね。平均的にレベルが高い印象があります。他の印象としては、これまでよりもモノログ系が多かったし、極端にコンセプチュアルな作品や型破りなテキストは減ったようにも感じます。テキストに対して距離を取っている作品が少ない。これまでの受賞作品を読まずに応募している人も多い気がします。

羊屋 今回は憲法、革命を扱った作品が結構あるなあという感じ。相変わらず整っているけど映画にした方が良くないかというものもあるけど。デザイナーさんとか、演劇じゃない人（演劇に普段関わっていない人）が多かったようにも感じた。

やなぎ ト書きに演出が書いてあるものはどう考えてますか？

テキストの力とはまた別のものかなとも思うんだけど。

鳴海 （ト書きに）拘束力があるわけではないです。

必要があれば、上演の時に演出と作家が話すことかなと思います。

篠田 書いてあるト書きに縛られる人も縛られない人もいる。書くことではなくて演出に集中しているものは（私は）違うかなと思う。今回の感想としては、ペンネーム使っている人が多い、って思った。初めての人がこれまでより多かったからかも。今回（募集のメッセージで）「初めての人に応募してください」、というコメントを出した。通じるんだなって思った。

司会 気になっている作品はいかがでしょうか。

羊屋 深谷さんの『西行と二条』。しっとりしてきた……ギャグも踊りもない……革命的な変化！あと、杉本さんの『雲路と氷床／赤裸々』、山内さんの『朽ちた蔓延る』も去年の作品（特別賞受賞作『白痴を笑うか』）から成長してきた。

やなぎ 『西行と二条』最近、私も高齢者の介護をしているので、身近な作品として考えられた。一服のお茶のような清涼感。

篠田 気になったのは『犬を案じて』。処女戯曲らしくて良い。絵コンテとテキストのバランスが凄い変な感じで面白かった。『朽ちた蔓延る』も良かった。『是でいいのだ』も誠実に書いていると感じた。上演されてるけど。

やなぎ 『是でいいのだ』はかなり（何度も）上演されて、練られている。

羊屋 『犬を案じて』はちょっと筒井康隆っぽい。

やなぎ 『ヤクタタズ！』の熱量は印象に残った。ちょっと作者に会ってみたい気もする。あと、『すごい機械』も自家中毒っぽいけど気になる。映画にした方が良くないかという作品も多かった中で『すごい機械』というタイトルのセンスがいいなど。



鳴海 古典を下敷きにしている作品も多くありましたね。単に設定の置き換えに留まっている作品は別にして、面白かったのは『impedance mismatch』『投影される私はいない』。参考にした作品を作家なりに読み解いて、作家なりの世界の厚みを加えていたと思います。『impedance mismatch』は三人姉妹をモチーフにして歴史と知識の無為感に挑戦していると感じましたし、『ワツィ 人民は敵、』はモノログで変革的な筆致なのが他のモノログに比べると社会性がありました。

羊屋 大逆事件とかを研究していて、それがこうなったのか、という面白さ。

篠田 私も『impedance mismatch』『ワツィ』は気になった。

- 鳴海 『投影される私はいない』もオハナシと言えばオハナシなんですけど…演劇で演劇について書く、演劇で映画について書く、という自己言及的な視点が単なるオハナシとは性質を変えています。“やってもしょうがないんだけどやるしかない”というのが良かったなど。最後の納め方に楽観も絶望も感じられました。
- 三浦 『犬を案じて』は何かある？絵が上手い以外に何かある？
- 篠田 空間の使い方とか色々面白いよ。
- 篠田 『木星のおおよその大きさ』も正統派の戯曲として推したい。『藤田まことのちょっとしたはなし』もわけわかんなかったけど面白かった。
- 鳴海 『木星のおおよその大きさ』はテンポとリズム感は面白いと感じました。ただ、その繰り返しとアレンジが軽妙に続いて終わってしまうのが物足りなく感じました。
- 三浦 『藤田まこと』はちょっとした話と言うか、ナンセンスと言うか、ちょっと面白い。
- 羊屋 まことさんはちょっとしか出てこないというのが良い。最後は歩く、歩く、歩く……。
- 三浦 『by us』、ちょっと度肝を抜かれた。これを高校生が書けるんだろうか。構成が面白い。
- やなぎ ジェンダー問題は深まってないけど……。
- 羊屋 『優しい乱暴』、会話と中ゼリ（中くらの長さのセリフ）のバランスが良かった。
- 三浦 良かったよ。これは二次審査に残した方が良い。
- やなぎ 同感。

以上のような議論を経て、下記14作品が一次審査通過作品となりました。

犬を案じて（沢井智）  
 impedance mismatch（岡本昌也）  
 朽ちた蔓延る（山内晶）  
 「雲路と氷床」/「赤裸々」（杉本奈月）  
 是でいいのだ（小田尚稔）  
 すごい機械（我妻直弥）  
 投影される私はいない（小野晃太郎）  
 by us（南山高校女子部演劇部・渡辺鈴）  
 藤田まことのちょっとしたはなし（藤田まこと）  
 木星のおおよその大きさ（犬飼勝哉）  
 優しい乱暴（亀井健）  
 「ヤクタタズ！」（フルカワトシマサ）  
 養老の西行と二条（深谷照葉）  
 ワツィ 人民は敵、（佐々木治己）



\* 並行して行われていた第17回AAF戯曲賞受賞記念公演『シティⅢ』の様子\*  
 戯曲:カゲヤマ气象台 演出:振子ぴじん 公演:2018年10月26日~10月28日

## 二次審査会(10月29日)

司会 それでは二次審査を進めて行きたいと思います。まず14作品一つ一つの作品についてお話ししつつ、ノミネート作品を選んでいきたいと思います。ノミネートする作品数の指定はありません。

### 犬を案じて

篠田 読み返せば読み返すほど、うーん……となる。書いてある世界観もあるし、面白いんだけど…。

やなぎ 良くも悪くも別格。想像の余地がない。

鳴海 作品内にあるイラストと、いわゆるト書きとは何が違うんでしょう？ 演出をテキスト側が指定していることと何が違うんでしょう？ シェイクスピアやベケットも、ト書きを詳しく書いてあるけれど、私はイラストよりもト書きの方がイメージの余地を感じます。イラストの方が演出、空間が束縛されているように感じるけど…。

篠田 私はそうは感じない。これをト書きで書かれたら、間が感じられなくて面白くない。イラストやコマ割りがあっても、その間でどれくらい時間をかけるかで変わる。舞台上でやっている絵コンテではないから、頭の中で考えると時間が流れるから違って見える。

羊屋 絵になっていると濃淡が分からない。平等になってしまう。

やなぎ 本人以外が演出する時に楽しみがあるのか……？

鳴海 書かれている形式として、映画やテレビなどのストーリーボードに近いですね。付されているテキストは論理的な言葉遊びが多い、ルイス・キャロルみたいな。それ以外の意味でも、家族で楽しめそうな作品になりそうです。

羊屋 掘ってる、というのが良いよね。

篠田 しかも、すぐ割り算引き算する。面白い。

羊屋 シンプルだけど関係性が面白い。



### impedance mismatch

羊屋 古今和歌集、平安時代を題材にしている。

三浦 いくつかあった震災を扱っている作品のひとつ。どちらかと言えば抽象的で頭でっかちな印象がある。

三浦 『西行と二条』、つまり時代劇で歌と言葉を使って戯曲を作ることと比べて、これはその現代版かなと思って読んだ。それが本当に面白いのか、という部分に疑問がある。本当にこれが書きたいことなのか。私としては評価が低い。一貫したイメージは持っているが何も言っていない感じ。まあ何も言っていないことをポジティブに考えると、「私たちは恋人や友達と重要な話はしていない」という表現でもある。それならもうちょっと頑張ってほしいと思う。日本では何か書こうと思った時に“海”という言葉を使いたがる傾向がある。

『朽ちた蔓延る』も最後が“海へ”となっている。比べるとこちらの海は無防備だなど。単なる憧れの対象として海を使っている。

羊屋 今、安易に“海へ”というのはちょっとね…

### すごい機械

篠田 映画見ている人なのかな。1シーン1シーンがバラバラってなっているのが面白い。

羊屋 広がるだけ広がって、最後まとまる。

鳴海 シーンごとに短編をつなぐ手法。ト書きでわざわざ「劇場」と毎回書いて、虚実を相対化していますね。演じられる仮想空間の相対化だということは分かるけど、それがシーン中ではなく、あえてト書きに集中している点が気になりました。

羊屋 ハードとソフトを同じところに置いている感じ。

三浦 イメージは興味深いけど物足りない。

羊屋 シーンを作るのが大変だろうなど。映画ならできるけど、というシーンもある。例えば電話するシーンでは金田さんが金田さんに電話している。翻訳した日本語みたいな感じを受けた。

鳴海 それも相対化かなと。

篠田 タイトルコールの労働者たちのシーン、良いと思った。考え甲斐がありそう。

- やなぎ ソビエトのアニメーション映画を基にしている。語る・語られる、のメタな視点。  
 鳴海 コンセプトノートには難しいチャレンジを書いているんだけど、実際書かれているのはファンタジックな印象です。  
 三浦 そのコンセプトから逃れられていない。せりふが浮いている。

### 朽ちた蔓延る

- 羊屋 異国の街を想定して読んだ。どこでもないところ、歴史上の東京なのかも、と思って読むと面白くなってくる。  
 やなぎ 遺跡を身体と声で構築するのは正統派。  
 鳴海 遺跡の時間をさかのぼりながら“想い”“人間”などの話題をずらしつつ多層化していく。未来で想定されている原対象は、始まりの時点の実際の対象とは異なるという結果が明らかになる、という構造は面白いです。  
 篠田 言葉のチョイスが好きだなと思って。去年の『白痴を笑うか』より断然好き。起こして、立ち上げてみたくなる。  
 三浦 ダイアログはある？  
 羊屋 ある。出てこない人のダイアログ。



### 「雲路と氷床」／「赤裸々」

- 鳴海 これまでの応募作（第15回AAF戯曲賞ノミネート作『居坐りの日』、第16回AAF戯曲賞一次審査通過作『草藁』）などに比べて、言葉自体が持っている力に頼ることから離れたのは大きな変化。インタビュー、ヒヤリング、他者のパーソナルなもの、自分ではないものを取り入れた点が面白く感じました。こういうテキストはドラマトルク的な拡張機能、つまり演出や俳優という現場に委ねられる部分が多いと思います。こういう委ね方を孕んでいるテキストは、読み手と共犯関係が築けるかが大切だと思います。そういう関係が築ける標石のようなものがないと、テキストとしては材料だけになってしまう。  
 三浦 アイディアとしては面白い。ただ、サンプルだけでなくもう少し展開が欲しい。  
 羊屋 インタビューの書き取りなのか分からないけど……（上演時に二人の登場人物は）同じ人は想定してないよね。ダイアログ以外のところで何かちょっとしたリンクイメージやキーワードがつながっていくような書き方があれば、それを頼りに終末に向かえるのに、と思った。それがあれば「二人から一人」というラストにも落とし込める。気が付くと一人になっているという最後は良いと思ったんだけど、そのための導線が欲しい。  
 篠田 材料だけで言ったら、例えば「あ」～「ん」まであれば演出はできるんだけどドラマトルギー無く材料だけあっても評価できない。  
 やなぎ キャストもテキストを書いているように思わせる、そういう作り。  
 羊屋 上演記録は戯曲ではない。  
 篠田 前半の食べ物から先生の話の部分はいいな、と思ったんだけど、“さて次は何について書くことになるのでしょうか？”で終わってしまったのが残念。

### 投影される私はいない

- 鳴海 “表現について表現する”というメタ的な自己言及性が、形式に溺れるだけじゃなくて、批評性も伴っているのが良かったです。登場する役名など、日常にフィクションやナンセンスを入れる方法が上手いし、こなれていると思います。  
 やなぎ 29歳にしては老成してるな、という印象。そういう意味では浅いのかも。終わりを知らない感じ。

### by us

- 篠田 読み直してみて面白かった。演出のセンスがある。アイディアは演出かな？  
 三浦 女子高でズボンをはいたりするのが上手いなと。  
 羊屋 ジェンダーのこととか、偏見のこととか、これからという感じがしてあと6ページくらい書いてほしいところではあるけど。  
 三浦 劇作というのはどうあっても社会的な行為なんだなと。日常の感覚を頼りに書いているんだけど、色々な問題やこれから起こる不幸を鮮やかに描いていて見事。

羊屋 すごい小っちゃいことからここまで広がる、というところを推したい。  
篠田 戯曲賞として推すか、というところが悩みどころ。作者自身が女子部の高校生、当事者ということだよな。  
三浦 当事者が少し俯瞰して話をしている、という構造は福祉（『ヤクタタズ！』）と同じなんだけど、こちらは色々と話が出る。そのことを考えさせられる。

#### 藤田まことのちょっとしたはなし

篠田 絶妙なテンションだなと。ダイアログで何だかわからないことを言っているのを推したい気持ちがあるけど、相対的に見ると何にも言っていないから……と  
思ったりもする。  
鳴海 これだけの分量で破綻無く書いていることには驚きました。  
羊屋 ぜんぜんちょっとしてない（笑）  
三浦 嫌悪感はないがそんなに特殊でもない。身の回りの話をだらだら書く、という  
のは良くある。悪意のある設定とか、よほどの文体がないと厳しい。  
篠田 もう少し武器をそろえると良いつてことかな。ネイティブアメリカンと紙袋と  
小ビンの話とか、好きなのところもある。  
鳴海 最大公約数的で、引っ掛かりがなさすぎてさらりと読めてしまうのが惜しいで  
す。  
篠田 名脇役がいたらまことさんが面白くなるんだけどなあ。

#### 木星のおおよその大きさ

篠田 改めて読んでみたら何にも無かったけど、やってみたくなる戯曲。  
鳴海 言葉のやり取りがピンポンみたいで楽しいですね。  
篠田 エコーみたいにしたり、20人でやり取りしたり、いっぱいいて大人数で繰り返  
したりしたら面白いかなと。何にも言っていないんだけど……引っ掛かる……  
羊屋 星をモチーフにすることは多いけど、この人はストレートで面白いなと思った。  
固有名詞みたいなのがここ一年くらいの言葉も多くて、どこまで飛ばしていく  
んだらうというのが気になる。  
鳴海 リズム、テンポ、言葉遊び、空転する人間関係が前景にあって、話題が変わっ  
ても、人物が変わっても、最後までその全景が動かないのがもったいない。

#### 是でいいのだ

三浦 震災を扱った作品は増えている。その中で、そのまま扱っているということに  
不安を感じるんだけど、ここまで潔いと好感が持てる。危なっかしい部分は  
多々あるし、配慮されているのかどうかと思う部分もあったが、女の家に戻る  
までの時間の経過を感じさせるという部分は新しい切り口だなと思った。

#### 「ヤクタタズ！」

羊屋 当事者ですよな。福祉施設で働いている方が書いた作品。  
鳴海 一部『ゴドーを待ちながら』をモチーフに使っていますね。  
篠田 （上演についての設定を）細かく書きすぎていて指定が多いけど、どう思いま  
す？  
やなぎ この人の頭の中で（上演の形が）できあがっているんだろうな、という感じ。  
その脳内上演への思い入れ方が凄い感じ。妄想力が凄い。  
篠田 ラッキー（『ゴドーを待ちながら』の登場人物のオマージュ）が入ってなけれ  
ば良いのに、と思うけど。  
羊屋 最後に「命の別名」（中島みゆき）をかける指定があって、それで良いのかな  
と思った。  
篠田 なぜそれにリンクしたのかを考えると良いのかなと思うけど。会場内は「星に  
願いを」で外が「命の別名」。他の曲でもやりたいことができれば良いので  
は？  
羊屋 ノミネート作として残したい。

#### 優しい乱暴

篠田 場が多い！14場。  
羊屋 ダイアログとちょっと長いせりふのバランスが凄く良い。「雲路」に比べた  
らきれいに辿れるんだけど。

鳴海 不足なく与えてくれる印象です。バスという乗り物、つまり身体は動かないんだけど外が動くという身体感覚の違和を使いつつ、空間を移動させる想い、願い、禍根の回収というのは、ある意味でとてもロマンチックだとは思いますが。  
羊屋 もっと抽象化すると銀河鉄道になるんだけど。メーテルと哲郎もいるし。

### 養老の西行と二条

羊屋 これまでの作品（過去特別賞受賞作『ダム湖になる村』『母系家族』など）に比べて、平安に時代が移って三人になった。良い意味でも悪い意味でも変わらない部分があって面白い。ただ、みんなが習う、知っている西行像に対してどれくらい作り込まれているかという点で衝撃が少なかった。  
やなぎ 毎年応募している作家さんなんですね。私は初めてなので審査の中でさわやかな読後感だった。ちょっとずつ洗練されている工芸品のような感じなのかな。  
羊屋 最初の手書きの勢いから引っ掛かりが無い感じになってしまったような……。

### ワッツィ 人民は敵、

三浦 面白かった。二次審査にはまとまって書けている作品が残っているんだけど、その中でもこの作品は司会者が出てきてテレビ的。演劇的でないことを分かってあえて書いている。書かれている内容も面白かった。かなりの力作で評価は高い。「我慢するしかない」という主張も伝わってきた。  
羊屋 去年の受賞作『シティⅢ』が平成の『寿歌』とすれば、これは平成の『十一匹の猫』のような……  
篠田 『十一匹の猫』の終わり方ってどうなるんだっけ？  
羊屋 大きな魚を取って国を作ったあと、2バージョンあって、ひとつは“一人が殺される”、たぶん撲殺、というような結末と、“魚を食べてみんな死んじゃう”水俣病を意識したような結末。  
篠田 作者はアメリカ在住。  
羊屋 ずっと書いてきた人。2016年執筆の作品。  
やなぎ 私も良いと思った。後半集中して読めて、終盤は演劇っぽいと思った。骨がある。  
篠田 趣味ではないけど最終に残る作品だなと思った。ただ、俳優を選ぶ時大変だなと。  
三浦 このとおりにやって、上演が面白いかどうかは疑問。読み物としては面白い。  
鳴海 わくわくしました。社会や経済の言葉をセリフになじませられるのは、今や貴重な印象もあります。気になるのは、この言葉が観客に対してどれだけ力を持ち得るかどうか、です。

＝ここまでの、ノミネート作として残したい作品を投票（複数投票）＝



司会 投票の結果、過半数が投票している『朽ちた蔓延る』『「ヤクタタズ！」』はノミネート決定で良いでしょうか。  
残りは票が割れて『すごい機械』『是でいいのだ』『投影される私はいない』『by us』『ワツィィ 人民は敵、』『木星のおおよその大きさ』です。  
一票も入らなかった作品についてはよろしいでしょうか。  
(一同了承)

司会 では『すごい機械』『是でいいのだ』『投影される私はいない』『by us』『ワツィィ 人民は敵、』『木星のおおよその大きさ』の中で、これはノミネートされるべき、という作品があればそれぞれお願いします。

篠田 書けているという意味では『ワツィィ』『是でいいのだ』は書けてる。『すごい機械』もかなり気になるラインではある。

三浦 『ワツィィ』はノミネートに残るべき作品だと思う。  
(残り4人賛同)

司会 では『ワツィィ 人民は敵、』もノミネート決定で良いでしょうか。  
(一同了承)



篠田 今回は力作ぞろいですね。

三浦 やはり『by us』はいいなど。大きな問題ではないかもしれないけど目の前にある問題でここまで書かれているというのが良い。

羊屋 個人的なところから、社会なところまで持って行ったということはグサッと来た。

やなぎ テーマ的にはみなさんが言うとおりなんだけど、表現力的な問題で、上演されることはない気がする。あと、『投影される私はいない』か『すごい機械』か。

篠田 確かにこの2作品は似ている。影絵感みたいな。『木星』を推したいけど……

鳴海 『by us』の物足りなさ、篠田さんが言う『木星』で広がる余地とは似ていると思うんですけど、それがテキストの意図によるものなのか、演出に委譲されているものなのか。

篠田 『木星』にもジェンダー(問題)はあるにはある。『by us』は演出の問題。『是でいいのだ』についてはどう？

羊屋 移動の距離は思考の距離、とも思うんだけど……。

鳴海 震災を扱っている、もしくは関わってしまっている部分の扱いが安易すぎる印象があります。その点に本人の自覚が薄い感じがあるのが気になりますね。

篠田 『是でいいのだ』は固有名詞、地名とかテレビとか曲名とか、意外と射程距離が短い気がする。『木星』はどうやったら面白くなるの、という点で“演出とは何か”を考えられる。声が多いとぐっとくるんじゃないか、と思って。間の使い分けもはっきりしているので。ただ、海外から見たら「現代の日本の希薄なコミュニケーション」みたいにまとめられそうでもある。これだけ(の分量が)あってこれだけの群像劇なんだけど……。他の作品を読んでみたい。このダイアログで進んでいって少しずつ関係性が変わっていくところとか、同じ名前が並んでいるところの間とか良いと思うんだけど。ただ、立ち上げる場所は演出かなとも思う。『by us』は演出のセンス、これでやると良いんだろうなというのも分かっているから広がりがない気がする。

やなぎ 『すごい機械』は美学がある。

鳴海 自分が立てたコンセプトとかミッションを、誠実に実現しようとしていて、実はなかなかできることではないと思います。そのコンセプト自体の精査は別に必要ですが。

羊屋 読解して終わる、というのが楽しいのか、という点。

鳴海 そこから敷衍してテキスト、ドラマ、劇場の異化というところまでたどり着ける要素はあると思います。

以上のような議論を経て、下記14作品が二次審査通過作品となりました。

朽ちた蔓延る（山内晶）  
すごい機械（我妻直弥）  
by us（南山高校女子部演劇部・渡辺鈴）  
「ヤクタタズ！」（フルカワトシマサ）  
ワッツィ人民は敵、（佐々木治己）

上記5作品の中から1月6日最終審査会により大賞・特別賞受賞作を決定します。  
作品はウェブサイト、審査会会場等でご覧いただけます。



2017年第17回AAF戯曲賞公開審査会の様子